



鳩が運んだフィルム、 カメラマンのパラドックス

会員 坂 仁根 (70期)

弁護士になる前は、共同通信社で20年間報道カメラマンをやっていた。知っているようで知らない報道カメラマンの「秘史」と「秘密」をお伝えしたい。

1 鳩が運んだフィルム

報道カメラマンといえば、速報だ。速報といえば、通信手段が問題になる。撮った方がいいが、さっさと写真を送信しないと、いわゆる「特オチ」になる。今はネット環境があるから、カメラ本体から瞬時に本社に送り込むことも可能である。しかし1960年ごろまで、速報の主演は、なんと「鳩」だった。全国の大手新聞社の屋上には、「鳩小屋」があったのである。

どうやってフィルムを鳩に運ばせるかという、撮ったフィルムを細く巻いて、暗箱の中の手作業で円筒カプセルに入れる。これを鳩の背中にくりつけて飛ばすのだ。5羽放って1羽戻ればいい方だったというから、のん気な時代だったものだ。

やがて弁当箱と同じくらいの大きさの「写真電送機」が登場する。トイレを暗室に改造してフィルムと写真を現像し、電話機につないだ写真電送機に写真を巻き付け、スキャンして送るようになった。撮ってから送信終了まで早ければ1時間程度。もっとも電話機と小型スーツケースくらいの暗室道具が必要だから、被災地やへき地での使用は限られていた。

劇的に変わったのは、デジタル時代の到来した2000年前後である。デジタル一眼レフカメラ、パソコン、衛星通信機インマルサット（弁当箱二つくらいの大きさ）という「三種の神器」の登場により、全地球からの即時送信が可能になった。

おかげで職場はブラックになった。どこにしようが何時であろうが関係なく写真を送らねばならなくなった。1999年の東ティモール独立紛争の時に私は現地にいたが、破壊され焼き尽くされた町で毎日魚と米だけの飯を食べて蚊帳の中で寝ながら、写真（添付紙面参照）だけは送らないといけない。つくづく文明の発達を恨んだものだ。

2 カメラマンのパラドックス

報道カメラマンは、「決定的瞬間」を撮る、というイメージがある。ところが、ある意味有名なパラドックスがある。カメラマンは、「決定的瞬間」を見てしまったら、その瞬間は「撮れていない」のだ。

パラドックスの原因は、一眼レフカメラの構造にある。シャッターを押していない時にファインダーから見える映像は全部ミラーの反射映像で、シャッターを切った瞬間、このミラーが跳ね上がり、視界を遮るとともに、フィルムあるいは受光素子に映像が焼き付けられる。「見る」と同時に「撮る」ことはできない構造になっている。

例えば、野球やサッカーで、ボールを打ったり蹴ったりする瞬間を捉えた写真がよくある。しかし、カメラマンにファインダー越しのその瞬間が見えたとしたら、その場面はミラーが下りていて映像は記録されておらず、「決定的瞬間」は撮れていない。そこでカメラマンは、見る前に、その瞬間を予想してシャッターを連続して切ることになる。記者会見の生中継などでよく聴こえる「バシャバシャバシャ」という連続音は、ミラーが跳ね上がる音だ。予想でシャッターを切るのだから、記者会見場がやかましくなるのも道理である。

沢木耕太郎も「カメラマンというのは、自分は見えない瞬間を撮ることに命を懸ける不思議な人種である」というようなことを書いていた。つくづく変な仕事をやっていたものだ、と今にして思う。



筆者撮影の写真が載った紙面